

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## 長野県山岳協会創立 50 周年記念祝賀会無事終了

11月12日に、長野市のホテル国際21において、長野県山岳協会創立50周年記念祝賀会が行なわれた。この1年は、長山協50周年ということで、10本の柱を立てて様々な事業を展開してきたが、一連の事業はこれをもって一段落。あとは多くの皆さんに寄付をお願いして進めて来た「山岳図書資料館」の建設事業を残すだけとなった。

当日は、日山協を始めとする関東、北信越の各都県の山岳（連盟）協会をはじめ関係諸団体、また中国登山協会、ネパール山岳協会からも代表団を招き総勢180名の大パーティであった。みんなで大いに語り飲み、最後は山の歌と信濃の国の大合唱。理事長という役柄、企画を中心になって進めてきたが、大きなミスもなく終了できた。関係各位のご協力に深く感謝を申し上げたい。

この祝賀会に合わせて、4種類の本が出版された。その1「長野県山岳協会創立50周年記念誌」その2「失敗・アクシデント事例集——何が起きたの？それでどうしたの？」その3「信州ふるさと120山」その4「高校生に夢を——初登頂 ヤズィックアグルの蒼い空」・・・というわけで、我がヤズィックアグル峰の報告書をこの祝賀会に間に合うように出版をすることができた。いずれも実費でお分けします。

なお、当日は石川県で北信越高体連の協議会もあった。今度全国高体連の副部長になったという手前、当然出るべき義務があったのだが、どうしてもそちらは失礼せざるを得なかった。北信越の高体連の皆様ご容赦下さい。次は春の恒例行事となった感のある山スキー研修会でお会いしましょう。

### ヤズィックアグルの蒼い空 20

### 慌ただしくBCを撤収

8月11日、朝起きると、松田さんがヤズィックアグルとの別れを惜しみ、カメラ小僧となっていた。黎明からずっと5分おきに色を変えるヤズィックアグルを追いかけていたそうである。朝食を済ませ、陽の当たってくるのを待って荷物の整理を始める。郵送する個人装備をおのおのプラ樽1個（計6樽）に、共同装備をプラ樽3個とプラパールボックス1個、背負子などの長物で1梱包とし、合計11個口にした。一つ一つの内容を精査し、重量を量り、中身をきちんと記録してリストを作る。日本への輸送はカシュガルから送るのが確実ということであるが、僕らは帰りはホータンを回り、カシュガルには帰らないので、トラックの運転手を經由してカシュガルの旅行社のトンさんに依頼するしかない。荷物が20kgを越えると受け付けてもらえなかったり、パッキングリストと内容物が一致していないといざ開封されたときに説明できなかったりと、自分たちがその場で対応できないことだけに、輸送係の久根さんの心労はひととおりでないはず。

昼前にはようやくすべてのパッキングが完了した。一段落したところで、さてアフタヌーンフラッドが来る前にと氷河の水で洗濯をし、頭から足の先まできれいに洗ってさっぱりした。食糧の余りもあった上に、ラマダン中のヌルさんに労を煩わせては申し訳

ないとの思いもあったので、今日の昼食は我々自身で用意した。食当の三戸呂君が腕をふるってくれて用意してくれたのは、炊き込みご飯、麻婆春雨と高野豆腐を使った合わせ技の麻婆春雨豆腐、豪華海草サラダ。食事のあとはポップコーンを作って暇つぶし。佐藤君はその間も原稿の送信に余念がない。13:30、暑くなってきたので、居場所を作ろうと松田さんの主導でタープ代わりにブルーシートを広げている時のことだった。2台のジープが砂埃をもうもうと巻き上げてやってきた。ジープは早くても明日の夕方かと思っていたところに突如現れた2台。事態はここから急転直下した。

ジープの運転手は、車のヘッドライトあたりを指さしながら、しきりにまくし立てる。何でも途中の道が洪水でやられていて、どんどん増水しており、ヘッドランプくらいの高さまで浸かりながらようようここまで来たとのことである。ずっと好天が続いた影響で、氷河の水がどんどん融け、洪水を起こしているというのだ。・・・だから、一刻も猶予はならない、今すぐ出発したいということのようだった。去年は大雨で洪水だったが、この地域はほとんど緑がないので、保水力が全くない地域。だから雨が降っても降らなくても洪水が起こるという極めて厄介な場所なのだ。実際、このあとそれを実際に体験することになるのだが・・・それは後述する。

というわけで、のんびり昼寝でも思っていたところが、急に撤収をすることになった。工事の通行規制の関係で早くても車の来るのは明日だろうと高をくくっていたのだから、大騒ぎ。我々は午前中のうちに荷物の整理ができていたからまだ良いが、大変なのはBCの撤収作業をするヌルさん。2時間の作業の末、まるで乞食の引越しのような体で、すべてを車に積み終えた。佐藤君も記事をこれからゆっくり送ろうとしていた矢先ただけに、車が動き出す直前までPCとにらめっこ。こうして16:30、慌ただしくヤズィックアグルとのお別れと相なった。

数えてみれば21日間、毎日が充実していただけに、それぞれの一日はどの一日も長かったが、終わってみればあっという間のできごとだった。この間、ヤズィックアグルは、ずーっと我々に優しい顔で接してくれた。C2を出る時にも歌った「雪山賛歌」の最後のフレーズを今日も歌ってBCを後にした。

17:30、アクサイ河とカラカシ河との合流点に到着。川は確かに増水しており、往路は何でもなかった河原に幾筋もの水流ができ、どこをどう通るかはドライバーの腕の見せ所である。ドライバーの秦さんがところどころに洪水で立ち往生した車があったと言っていたが、これはほんの序の口。その後も至る所であふれた水が道を塞いでいた。カラカシ河の水量も来たときよりも随分多い。そんな中を僕らを乗せた2台のジープ（ニッサンパトロールと三菱パジェロ）は、なんとか進んでいくが、隊の荷物を積んだトラックが遅れがちである。先に行っては到着を待ってという形で、進んでいったが、許可証提示の関係で一緒に通過せねばならない三十里営房という軍隊の駐屯地の手前で待っていたが、全然追いついて来ない。何かあったかと様子を見に戻ると、なんとクラッチワイヤが切れてしまったとのこと。すわ一大事。ドライバーたちは三十里営房の修理工場で修理するしかないという。しかし、「軍の許可書には『三十里営房と大紅柳灘の間は停車もしてはいけない』と書かれている」と、その部分を示してヌルさんは困り顔である。とにかく国境未確定地帯で、この二つの駐屯地のちょうど真ん中は中国の主張する国境とわずか28kmの地点であり、そこから国境まで軍事道路があるというデリケートな場所である。すでに時刻は9:30をまわり、あたりは真っ暗である。さあ、どうなる？